

ヨーロッパにおける 19世紀日本関連在外資料 調査研究・活用

日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築

Insights into Japan-related Overseas Artifacts and Documents
from the 19th-century in Europe, Research and Use :
Developing the Foundation for International Collaboration
in Transmitting Japanese Culture

NEWS LETTER

vol.04
2020.03



ミュンヘン五大陸博物館「Collecting Japan」展の展示風景

CONTENTS

- 在外資料調査研究プロジェクトの概要 2
- 活動報告 ウィーン・チーム 2
ウィーン世界博物館における国際連携展示の開催
(2020年2月13日～5月5日)
- コラム・研究の現場から 4
明治の調べ：ウィーン世界博物館所蔵
ハインリッヒ・コレクションの楽器から
- 活動報告 ウィーン・チーム 6
ミュンヘン五大陸博物館「Collecting Japan」展の開催
(2019年10月11日～2020年4月26日)

- 活動報告 イギリス・チーム・総括班 7
シンポジウム「海外で《日本》を展示すること」の開催
(2019年10月5日)
- 活動報告 スイス・チーム 7
ロイトリンゲン大学におけるシンポジウムの共催
(2019年11月14日・15日)
- 刊行物紹介 8
・Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten
・「日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国」



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History



人間文化研究機構
基幹研究プロジェクト
NIHU TRANSDISCIPLINARY PROJECTS

国立歴史民俗博物館（歴博）では、人間文化研究機構によるネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用」の一環として、2016（平成28）年度から「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」を推進しています。

このプロジェクトは、ヨーロッパ各地に現存する19世紀に形成された日本関連資料の調査をおこなうのみならず、それらをデータベース公開、展示、シンポジウム、教育プログラム（セミナー・ワークショップ・大学教育等）など、多彩な方法により効果的に活用することにより、日本研究や日本文化理解を促進することをねらいとしています。以下にあげる3つの異なる地域における異なるレベルの事業を、現地の博物館・大学などとの学術交流協定のもと、共同で展開することにより、日本・現地双方へ成果の還元を図るとともに、日本文化発信の国際連携モデルの構築を目指すものです。

今回のニューズレターでは、今年度、海外で開催したシーボルト父子に関する二つの展覧会を中心に紹介します。

まず、2019年秋からオープンしたのは、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの2度目の来日時のコレクションを、地元ミュンヘンで紹介する展覧会です。これは、2016年度から2017年度にかけて国内5会場を巡回した展覧会の凱旋展示に相当します。

一方、ウィーンの展覧会は、世界博物館が所蔵するシーボルトの二男ハインリッヒの収集資料で構成されます。世界博物館におけるハインリッヒ・コレクションの調査研究は、いまだ進行中ですが、日本オーストリア友好150周年を記念して、日奥の共同企画として国際共同研究の最新成果を紹介すべく企画されました。

【ウィーン・チーム】ウィーン世界博物館が所蔵するハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションなど、シーボルトの子どもの時代の収集された「もの資料」および文献資料の総合調査をおこない、データベース化、展示等の活用事業へと展開させる《資源基盤型》の調査研究事業

【イギリス・チーム】博物館学芸員や教育普及担当者と共に、現地の実情やニーズに応じた日本展示を各地で実現させるイギリスを対象地域とした《対話型》の日本展示活性化事業

【スイス・チーム】スイスを対象地域とし、現地大学及び博物館との連携による資料調査と展示協力を通じて、国内外の日本研究者の養成を支援する《人材育成型》の大学教育連携事業

ウィーン・チーム 活動報告

ウィーンを中心としたシーボルト（子）収集日本関係資料の調査研究

ウィーン世界博物館における国際連携展示の開催

2020年2月13日～5月5日

「Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold」展
（邦題：「明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から」）
会期：2020年2月13日～5月5日
会場：ウィーン世界博物館（オーストリア・ウィーン市）
主催：ウィーン世界博物館、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

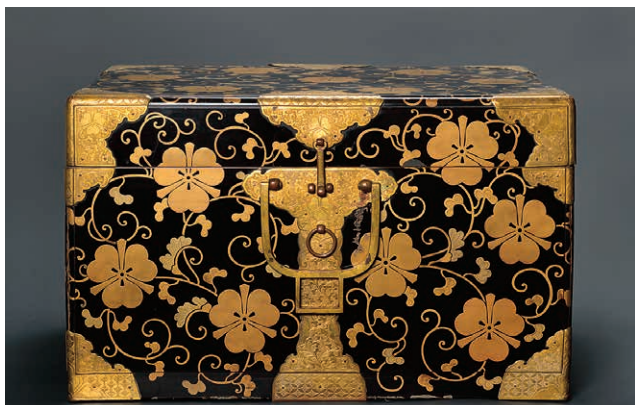
2020年2月13日、歴博とウィーン世界博物館との連携事業による企画展示が、ウィーンにてオープンした。この展覧会は、本プロジェクトにより進行中の世界博物館所蔵ハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908）収集資料、約5000点に関する調査研究の中間報告として、同館との共同企画で開催するものである。ドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの二男ハインリッヒは、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官として活動しつつ、日本考古学の黎明期に重要な役割を演じたことでも知られる人物であ

る。兄のアレクサンダー・フォン・シーボルトとともにウィーン万国博覧会における日本展示に関わったほか、膨大な日本資料を収集してヨーロッパ各地にもたらし、日本文化の紹介に尽力した。世界博物館のコレクションは、ハインリッヒが1889年、同館の前身である帝室ならびに王室自然史博物館に寄贈したものである。

歴博は、人間文化研究機構が推進する研究事業の一環として2011年より同コレクションの予備調査をおこない、担当学芸員であるベッティナ・ツォルン氏と詳細な調査準備・打ち合わせを重ねたうえで、2016年より現在のプロジェクトを発足させた。すべての資料を等しく調査することを基本理念として、年2回、2週間ほどの総合的調査と撮影を継続し、その結果をデータベースとして順次公開している（《データベースれきはく》「シーボルト父子関係資料データベース」）。これまでに日本から派遣した専門家は18名、考古資料、アイヌ関係資料、漆工、陶磁、金工、染織、絵画、仏教彫刻、武器武具、楽器、農具、漁労具、宗教関係用具、その他生活用具などの分野にわたって詳細な調査をおこなってきた。調査研究はまだ終了していないが、明らかになってきたことも多いため、最新の成果を反映させた展覧会を現地において開催することとなった。



「明治の日本」 展会場



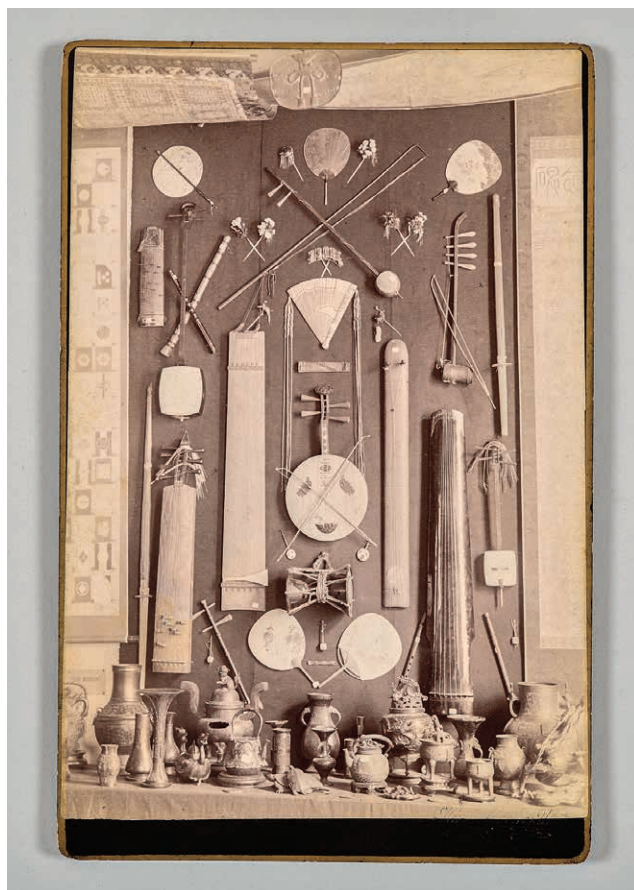
剣杵漿草紋散唐草文時絵挾箱 江戸時代後期

世界博物館のハインリッヒ・コレクションについては、一般にはさほど知られていないが、1996年にシーボルト生誕200年を記念して開催された「シーボルト父子のみた日本」展（東京都江戸東京博物館・国立民族学博物館・林原美術館を巡回）において、すでに多くの資料が里帰り展示を果たしている。また、翌1997年には、ウィーン応用美術博物館においても、「Japan Yesterday: Spuren und Objekte der Siebold」展が開催されて、コレクションが紹介された。

そこで今回の企画展示では、これらの展示とは少々趣向を変え、ハインリッヒが収集資料を持ち帰った19世紀のヨーロッパにおける展示風景を入口として、ハインリッヒ・コレクションに光をあて、彼が伝えようとした明治時代の日本の姿を紹介することとした。ここで使用したのは、歴博が継続的におこなっているシーボルトの末裔ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家における調査過程で2014年に発見された4枚の古写真である。

19世紀後半に撮影されたセピア色の写真には、ハインリッヒが収集した日本資料の興味深い展示光景が浮かび上がる。壁面に多くの資料をあたかも文様を描くように配列し固定させた独特の方法は、19世紀のヨーロッパにおける博物館展示スタイルのひとつといっていよう。その一枚には、陶磁器と農具・漁労具、アイヌ関係資料、貨幣を配置したコーナー、その二は、武器武具と漆工芸品を並べたもの、その三は、青銅器に楽器、装身具を組み合わせた展示が写されており、いまひとつの写真は、二番目の写真に写るコーナーの前の空間に置かれた大きな三体の仏像をとらえている。

2018年から歴博は世界博物館と共同で、これらの写真に写り込ん



19世紀の古写真 コレクションの展示風景
(ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵)

でいる資料の一つ一つを丹念に検討し、その大半が現在世界博物館に所蔵される資料であることを確認した。残りの一部は、ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家、ヴェルツブルクのフランケン博物館、ウィーン応用美術博物館の所蔵品であることも判明した。

さらに、写真の一枚には、ウルムの写真家カール・メッケス（Karl Meckes）の商標が空刷りされていることから、日本から届いたコレクションが保管されていたウルム近郊のエルバッハ城内で、おそらくこれらの写真が撮影されたということもわかってきた。ハインリッヒは、収集した日本資料を各所に売却したり寄贈したりしているが、この写真は、いわば日本コレクションの「売り込み」のために撮影されたものといえるだろう。

展覧会開催にあたっては、企画立案や展示資料の選定の段階から、日本とオーストリアのスタッフが協力し合い、役割を分担しながら準備作業を進めていった。日本側は、大半の資料の撮影と資料解説の執筆を担当したほか、公立はこだて未来大学の原田泰のチームが動画を制作して世界博物館に提供した。古写真の上に現存する資料のカラー画像が次々と重ねられていく様子を会場のスクリーンに実物大で映写する演出により、研究成果をわかりやすく、かつ印象的に伝えることが可能となった。

会期中に開催予定であった国際シンポジウムは、新型コロナウイルス感染の拡大の影響で延期となってしまったが、このような実体を伴った国際連携展示を、国際協力日本オーストリア友好150周年の節目に開催できたことを喜ぶたい。

明治の調べ：ウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ・コレクションの楽器から

ウィーン世界博物館が所蔵するハインリッヒ・フォン・シーボルト収集資料には、84 点の楽器が含まれる（模型を含む）。数量的にはそこそこの点数であるが、日本の伝統楽器を網羅しているわけではなく、かといっていずれかの分野に特化されてもいない。残念ながら体系的なコレクションとはいえない、というのが第一印象であった。しかし、調査を進めるにつれて、国内の伝世品には見られない珍しい楽器が少なからず含まれていること、またおぼろげながら明らかになる収集傾向から、最初の評価を撤回すべきであるとの認識に至った。ハインリッヒ収集楽器資料は、まさにコレクションが形成された時代を反映しているという点で極めて興味深い。以下にいくつかの例をあげつつ、その特色について紹介してゆきたい。

最初に、愛すべき楽器のミニチュア模型一式 (034616) (図 1) をとりあげよう。厳密には楽器資料とはいえないが、ハインリッヒ来日時の日本の音楽文化の状況を示すものとして貴重だからである。

浅い箱の中に並べられた楽器模型は、江戸時代から受け継がれ大衆に広く支持された箏・三味線・胡弓、江戸時代後期以降新たに注目を浴びるようになった一絃琴・二絃琴、明治時代前半の日本で幅広い人気を博していた明清楽の主要楽器である月琴・阮咸・提琴からなる。幕末頃に制作された雛道具の中には、箏・三味線・胡弓の「三曲」や、雅楽器一揃いのミニチュアをしばしば見かけるが、本模型の構成は明清楽器などを含む点で雛道具の定番のミニチュア楽器とは異なっている。後に述べるように、明治時代初め頃の時勢を反映した組み合わせといえるだろう。

江戸時代後期頃から、手先の器用な職人の技を活かした極小雛道具類の制作が盛んとなった。これらはやがて日本を訪れた外国人の眼にも留まり、様々な種類の模型を購入して持ち帰るのみならず、大規模な建物模型などの注文制作も行われるようになった。各々の楽器は、小さいながらも精巧なつくりで、実際の楽器の縮尺模型とみられる。ハインリッヒが注文して作らせたという可能性もあるだろう。

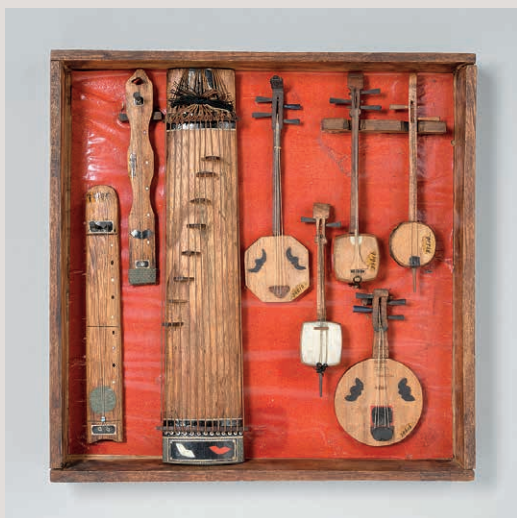


図 1 楽器のミニチュア模型

さて、ハインリッヒの楽器コレクションの一つの特色は、模型にもある「明清楽」の楽器を含むことである。

明清楽とは、明朝および清朝の音楽の意で、江戸時代に中国から伝来し日本に定着した音楽を総称することばである。文人を中心に公家や武家のあいだで流行した「明楽」は、明和年間（1764-72）をピークに衰退したため、これと入れ替わるように普及した「清楽」のみをさして、明清楽と称することも多い。清楽は、享保年間（1716-1735）以降、長崎に来航した「唐人」すなわち清朝の貿易商人たちが伝えた民間音楽で、唐人屋敷に出入りを許された唐通事や役人、さらには丸山の遊女など様々な人々を介して広まったといわれる。幕末を経て明治時代に至ると、楽譜の和刻本が多数出版され、長崎から上方、江戸にいたるまで、男女貴賤を問わず広く普及し爆発的な流行をみた。明治 27 年（1894）に勃発した日清戦争を境に急速に衰えたが、日本の大衆音楽に大きな影響を残したと考えられている。明治時代になると西洋音楽が移入され、いわゆる邦楽と入れ替わっていったと単純に考えがちであるが、明治時代前・中期の多くの人々にとって、じつは洋楽より親しみ深い存在だったのが明清楽なのである。

明清楽で用いられる楽器には、月琴をはじめとして約 20 種類の中国起源の楽器が知られる。なかでも月琴は、婦女子の嗜みとして全国の一般家庭においても演奏され、大人気を博した。ハインリッヒ・コレクションは、このうち月琴 (037317) (図 2)・胡琴 (037316)・提琴 (037314)・携琴 (037315) (図 3) という主要な弦楽器を含み、収集時期がある程度明確であることから貴重である。演奏に用いる楽器は中国から長崎経由で輸入されたが、ほどなく国内で倣製楽器も製作されるようになった。世界博物館所蔵の月琴には、東京三田四国町「鐸斎」の商標が貼られており、この町名が使用されるようになった明治 5 年以降に、和漢楽器を製造販売した「石邸巳之助」の店で販売されたものであることが知られる。

一方、胡琴・提琴・携琴はともに中国で発達した擦弦楽器であり、一般に「胡琴」の名で総称される。楽器の名称は複雑で、時代や地域などによって呼称が異なるが、日本の明清楽においては中国の二胡にあたるものを胡琴と称している。

興味深いことに、これら 4 点の明清楽器はすべて、ハインリッヒが琉球で収集したとされる 115 点の資料の中に含まれている。先述の通り明清楽は長崎経由で日本に伝来したが、中国と盛んな交流があった琉球においても、御座楽で同種の楽器が使用されたことから、これらの楽器の制作地については今後更なる精査が必要である。

次にとりあげるのは「八雲琴」の名称で知られる二絃琴 (034605) (図 4) である。これも、19 世紀の特色を示す楽器として注目される。

八雲琴は、文政 3 年（1820）、伊予国（現在の愛媛県）の中山琴主が、出雲大社などに献奏する音楽のための楽器として創案したもので、彼の門下によって中国地方から関西、関東にまで普及し、明治時代の大阪では明清楽とともに非常に流行した。竹を模して節を彫り表した杉材を胴とし、尾部に転軫（糸巻）を立てて二本の絃



図2 月琴



図3 携琴



図4 八雲琴（二絃琴）

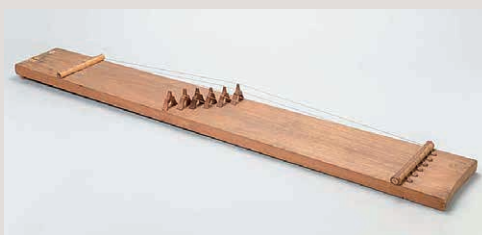


図5 大平琴

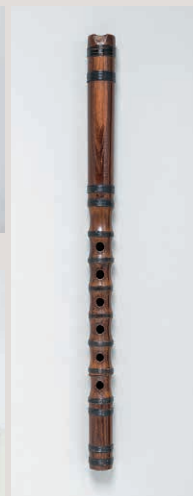


図6 木管 尺八系の縦笛

を同音に調律する。爪弾く部分には円形の錦を貼る独特の外観である。表面に31個の徽(き)を配して勘所の目印とするが、ハインリッヒ収集の八雲琴では、風流な蛸形の銀製金具を徽としている。

江戸後期以降、一部の学者や、文人、武家によって、失われた古の音楽を求める気風が高まり、古楽曲の復興や、伝説上の楽器の復元が盛んとなった。一絃琴(板琴)や二絃琴の流行は、このような流れから生まれたものである。明治時代になるとこの動きは、さらに時代の変化と相俟って、新楽器の考案へと繋がっていく。コレクションには、類例をあまりみない極めて珍しい楽器がいくつか含まれるが、これら(七絃琴 34603・六絃琴 34604)も、このような試みの中で作られた新しい楽器であるかもしれない。

そのひとつは、細長い一枚板をえぐって作った舟形の槽を伏せ、頭部と尾部とにそれぞれ竹の棒を渡して、六絃を張るだけの簡素な構造の楽器である(034604)(図5)。底板はなく、尾部の裏にも竹を貼って脚部とするが、頭部裏両端に臍穴があることから、ここに竹または円柱状の木材を挿入して脚(龍手)としたものと思われる。長さ115.2cmで、6個の箏柱が附属する。

六絃の「こと」と言えば、日本の弦楽器として最も古い歴史をもつ和琴があり、本資料もその流れを汲むものと推測されるが、通常の和琴とは大きさも構造も大きく異なる。伝世する類例としては、天保5年(1834年)に制作された「太平琴 春イ(さんずいに猗)」と称する底板を持たない六絃琴(鍋島報効会所蔵)が知られるが、長さ75.1cmで小ぶりである。こちらには和琴で用いる柱と、箏で使用する形式の爪2個が附属しており興味深い。

弥生時代以降の各地の遺跡からは、和琴の源流とみられる板状の楽器が出土しており、それらの中には底板をもたないものもある。六絃琴は、幕末ごろの復古趣味を反映して創作された楽器かもしれないが、和琴と箏の要素が混ざり合っており、出自は不明である。

このほか複数の楽器を合わせたような楽器といえば、極めて珍しい縦笛(034608)(図6)の例がある。切り落とした歌口の形状から尺八の一種と推測されるが、竹製ではなく木製で、指孔が7孔であること、指孔周辺に谷割りを施して、指孔間に樺を巻く点などが通

常の尺八からはかけ離れている。外観はむしろ、雅楽で用いられる龍笛や、能楽で用いられる能管などの横笛に近い。「木管」と称する江戸時代に制作された類例(個人蔵)がわずかながら知られるが、伝世例は極めて少なく未詳である。

ハインリッヒが日本資料を盛んに収集した明治の初年は、堰を切ったように流入する新しい文化を受入れつつ、そうした外からの視線が逆に古いものを見直す動きを生み出し、新たな価値観や制度が芽生えた時代であった。新旧の意識が交錯する状況は、音楽文化の分野にも顕著であり、ハインリッヒ・コレクションの楽器は、こうした時代相を映し出しているといえるだろう。上記のような特色ある楽器を含む反面、奇妙なことに、コレクションには、笙や琵琶、箏、龍笛など、平安時代以来の伝統をもつ雅楽器が一切見あらず、また、武家の式楽として普及していた能楽の囃子方が用いる楽器についても、小鼓のみが2点あるだけで、能管や大鼓、太鼓を欠いている。三曲合奏に用いられた三味線・箏・胡弓は含まれており、この傾向は、ミニチュア模型の楽器構成と一致する。

つまり、江戸時代以前の武家や公家に支持された音楽ではなく、江戸時代には巷で大いに発達したが「俗楽」と位置づけられ、明治時代になりさらに展開して、貴賤を問わず親しまれた楽器を、彼は積極的に収集したということになる。もっとも、ウィーン世界博物館でコレクションの受贈に関わったフランツ・ヘーガー(王立管理官兼部門長)は、1889年2月6日付の評価書の中で、「それぞれの部門、すなわち古代の遺物と楽器の補充については寄贈者が確約している」と記しており、このコレクションが完全なものではないことは、ハインリッヒ自身、充分自覚していたようである。雅楽器などに比べてこれらの楽器の方が入手しやすかったという現実的な事情もあっただろう。いずれにせよ、ハインリッヒの未完の楽器コレクションは、伝統音楽と近代音楽との狭間で忘れ去られた明治の調べを伝える貴重な資料と言えるだろう。

(国立歴史民俗博物館 日高薫)

ミュンヘン五大陸博物館 「Collecting Japan」展の開催

2019年10月11日～2020年4月26日

Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten 展

(邦題:「日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国」)

会期: 2019年10月11日～2020年4月26日

会場: ミュンヘン五大陸博物館 (ドイツ・ミュンヘン市)

主催: ミュンヘン五大陸博物館、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

ミュンヘン五大陸博物館との長年の連携事業による企画展示が、ミュンヘンにて2019年10月11日にオープンした。この展示会は、五大陸博物館に所蔵されるシーボルト・コレクション約300点を展示するもので、2016年度から2017年度にかけて日本国内で開催された「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」展の凱旋展示に相当する。

ドイツ人の医師・博物学者で19世紀に二度にわたり来日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) は、江戸時代の日本に近代的な医学を伝える一方で、日本研究に勤しみ、日本の自然や生活文化に関わる膨大な資料を収集してヨーロッパに持ち帰った。このうちミュンヘンの五大陸博物館には、シーボルトが二度目に来日した1859年から1862年にかけて収集され、彼の死後バイエルン王国によって購入された6000点を超える民族学資料が所蔵されている。

歴史を中心とする研究組織は、本プロジェクトの前身となる「日本関連在外資料の調査研究」「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」(2010-2015)の一環として、シーボルト関係資料の総合的な調査研究を推進し、五大陸博物館においては通算12回におよぶ調査の結果、コレクション全ての調査を完了した。その結果は、《データベースれきはく》「シーボルト父子関係資料データベース」として公開中である。さらにこれらの調査と併行して進められた関連文献資料の研究との融合によって得られた成果をもとに、現在のプロジェクトのもと「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」展を企画し、2016年度から2017年度にかけて国内5会場を巡回した。

このような日独の共同プロジェクトによる成果を、今回、ミュンヘンの地に還元することが実現したわけである。シーボルト・コレクションは、五大陸博物館においても長らくまとまって展示される機会がなかったため、今回の大規模な展示会は、ドイツ人にとってはほとんど知られていないシーボルトを紹介する企画として各方面から注目されている。



展示の様子 ドイツの人たちには珍しい貝合の道具



《データベースれきはく》も展示室からアクセスできる



鶴蒔絵蓋物 (ミュンヘン五大陸博物館蔵)

イギリス・チーム 活動報告

シンポジウム

「海外で《日本》を展示すること」の開催

2019年10月5日

本プロジェクトでは、ヨーロッパ各地における日本関係資料の調査とデータベース公開による資料情報の共有化を推進すると同時に、これまでの在外資料調査研究とその成果活用のあり方を見直し、グローバル時代に相応しい新たな日本文化発信の方法を、海外の研究者との協働により模索する試みを実践してきた。とりわけ2018年夏にウェールズ国立博物館において開催した「KIZUNA: Japan | Wales | Design」展は、国際連携展示という手段による在外日本資料の活用例として注目された。

そこで、「KIZUNA」展を振り返り、その意義や開催経緯を報告しあうとともに、海外において日本関係の展示をおこなうことの困難や課題等についても議論しあうことを目的として、2019年10月5日、第36回人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること」（於：東京大学本郷キャンパス法文2号館2階一番大教室）を開催した。本シンポジウムは、ウェールズ国立博物館の協力のもと、デイビッド・アンダーソン、ウェールズ国立博物館長を特別講演者に迎え、英国ウェールズ政府、外務省、



全体討論の様子

文部科学省、国際交流基金の後援を得ておこなわれた。参加者は73名、講演表題・報告者は、以下の通りである。

趣旨説明 日高 薫（国立歴史民俗博物館 教授）
「交流史を見つめ直す：ウェールズにおける特別展覧会「KUZUNA」の開催」
デイビッド・アンダーソン（ウェールズ国立博物館館長）
「ウェールズ国立博物館、KIZUNA 展開催までの道のり」
三木美裕（国立歴史民俗博物館客員教授）
「日本のやきものを飾る—海外美術館における展示事情」
荒川正明（学習院大学教授）

スイス・チーム 活動報告

ロイトリンゲン大学における シンポジウムの共催

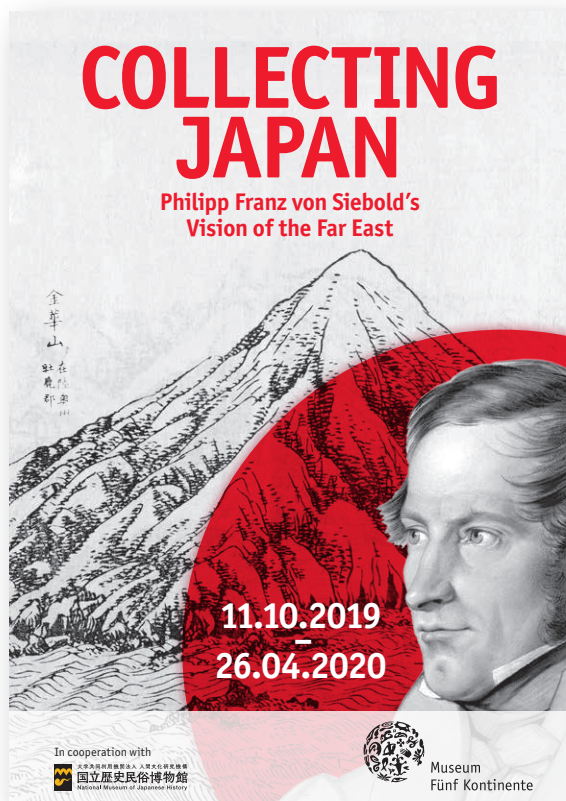
2019年11月14日・15日

1876年、明治政府に招聘されて来日し、日本の医学界に多大な貢献を果たしたことで知られるエルヴィン・フォン・ベルツ（Erwin von Bälz, 1849-1913）は、ハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908）の親友でもあった。彼が出身地であるヴュルテンベルク王国の産業博物館に売却した日本関連資料の多くは、現在シュトゥットガルトのリンデン博物館の所蔵となっているが、プロジェクトでは、従来専門的調査が及ばなかったロイトリンゲン大学所蔵のベルツ収集日本染織資料約900点の調査を進めている。

今回開催された国際シンポジウム「Historical Fabrics in a Digital World: The Textile Collection of Reutlingen University」（於：ドイツ・ロイトリンゲン大学）は、この国際共同調査研究事業の成果によるもので、ロイトリンゲン大学主催、そして共に調査に携わってきたチューリッヒ大学、ベルン大学、国立歴史民俗博物館の共催により実施された。プロジェクトのメンバーからは、ハンス・トムセン（チューリッヒ大学）、澤田和人（国立歴史民俗博物館）などが参加したほか、日本、

シンポジウムチラシ

アメリカ、ヨーロッパから13名の報告を加え、歴史的な染織品コレクションの過去、現在、未来を検証した。とくに、19世紀から20世紀初頭にかけての染織品コレクションにおけるベルツ・コレクションの意義や、今後の染織品コレクションの活用のありかたと研究者のネットワーク構築等をめぐって、活発な意見が交わされた。



Collecting Japan.

Philipp Franz von Siebold's Vision vom Fernen Osten

ミュンヘン五大陸博物館で開催された「Collecting Japan」展（当ニュースレター p.6 で紹介）の展示ハンドブックです。展覧会の展示室構成にしたがって、五大陸博物館所蔵のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト収集資料の由来や、シーボルトが考案した日本資料の独自の分類基準、そして展覧会に出品された約300点の資料解説を掲載します。

判型：A 5判

総頁：88 ページ

発行年月：2019 年 10 月

編集・発行：Museum Fünf Kontinente



日本を集める

—シーボルトが紹介した遠い東の国

ミュンヘン五大陸博物館で開催された「Collecting Japan」展（当ニュースレター p.6 で紹介）の展示ハンドブック（ドイツ語）の一部を、国立歴史民俗博物館の責任において日本語訳した小冊子です。ドイツ語版ハンドブックの主要な解説と、出品された約300点の資料のリストを含みます。

価格：（非売品）

判型：A 5判

総頁：40 ページ

発行年月：2020 年 1 月

発行：国立歴史民俗博物館

発行日：2020 年 3 月 31 日

編集・発行：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」プロジェクト 総括班

デザイン：株式会社デザインコンパス

印刷：株式会社 弘文社

画像提供：Museum Fünf Kontinente, Weltmuseum Wien, Brandenstein-Zeppelin Family Archives, 人間文化研究機構

ホームページ：http://e-zaigai.jp/

国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117 番地 Tel.：(043)486-0123（代表）